

聖バジリオ司教の「聖霊論」
(330-379年、カエサレアの司教、教会博士)

聖霊のさまざまな働き

聖霊のいろいろな呼び名を聞いて、心の中で喜びおどり、最高の本性にいたるまで思いめぐらさないことがあるだろうか。聖霊は神の霊（創世記 1.2 参照）、御父のもとから出る真理の霊（ヨハネ 15.26 参照）、正しい霊（詩編 51.12 参照）、指導する霊（詩編 51.14 参照）と呼ばれる。そして、その固有で主要な名は、聖なる霊である。

聖化を必要とするすべての者は、この聖霊へと向かう。徳に従って生きているすべての者は、この聖霊を希求し、自分の固有で本性的な目的を達するために、この聖霊の息吹を受けてかんすい灌水され、助けられる。

聖霊は聖化の源、理性を照らす光であり、理解する力をもつすべての者に真理を探究するために一種の明かりとして自らを与える。

聖霊は本性からしては近づきがたいが、そのいつくしみのゆえに自らをとらえうるものにする。聖霊はその力によって万物を満たしているが、ふさわしい者だけがそれにあずかることができる。しかも、聖霊は同じ程度でご自分を分かち与えるのではなく、信仰の度合いに応じて（ローマ 12.3 参照）その活力を分かち与える。

聖霊は、その本質においては^{いつ}一であるが、能力の点では多様である。聖霊は全体としておのおのの人と共にあり、また全体としてどこにでもおられる。聖霊は自らを分かち与えるが、そこ損なわれることはない。人々は聖霊にあずかるが、聖霊は完全

無欠のままとどまる。それは太陽の光線に似ている。すなわち、光線の快い光は、それに照らされる人にとっては一人それを享受しているかのようにその人のもとにあるが、実際には地や海を照らし、大気と一つになっている。

聖霊も同様に、それを受ける一人ひとりに、その人だけと共にいるかのようにでありながら、すべての人に十分かつ全面的に恵を注ぎ入れる。だれでも、その人の受ける器の大きさに応じて、聖霊の余すところのない力にあずかる。

この聖霊によって心は高みへと引き上げられ、弱い者は手を引いて導かれ、進歩する者は完成される。聖霊は、あらゆる汚れを洗い清められた者を照らしながら、彼らとの交わりをとおして、彼らを靈的なものとする。

また、つやのある物体や透明な物体に光線が当たると、それらの物体は明るく輝き、自らも光を発するようになるのと同じく、霊を受け、霊によって照らされた魂は、自らも靈的なものとなり、他の者にたいしても恩恵を発するようになる。

聖霊を受けると人は、将来起こることを予知し、隠された諸神秘を理解し、分かち与えられるもろもろの賜物を受け、天の国籍を与えられて天使たちと共に舞うようになり、終わらない喜びを受け、神のなかにとどまり、神に似たものとなる。さらに、神そのものになるのである（二ペトロ 1.4 参照）。これ以上崇高なことを望みえようか。